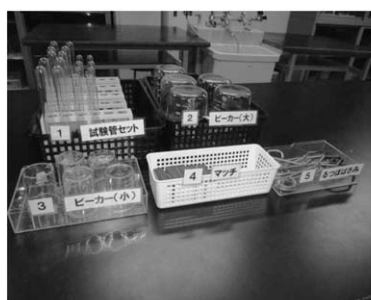


支援体制づくり取組事例集

—子どもと家族を支える推進校・推進地域の取組—



北海道教育委員会 北海道保健福祉部

取組事例集の発行に当たって

【推進校編】について

道教委による調査では、道内の公立の幼稚園、小・中学校、高等学校等のうち約6割の学校等において、特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒が通常の学級に在籍している実態が見られ、こうした子どもたちに適切な指導や支援を行うことができるよう、障がいの特性等について、教職員の理解を深めることが求められています。

このため道教委では、全ての教職員が、発達障がいを含む障がいのある子どもへの指導や支援に関する基礎的な知識や技能を習得できるよう、平成26年度から27年度にかけて「発達障がい支援モデル事業」を実施し、この中で、27年3月に、モデル校の取組や成果を掲載した「校内研修プログラム」を、また、28年3月には、モデル校・協力校における「校内研修プログラム」活用の実践事例を掲載した「通常の学級における特別支援教育の視点を生かした『実践事例集』」を作成し、道内の全ての学校等に配付したところです。

今回は、これまで各学校が行ってきた実践を踏まえつつ、「教育と福祉等との連携」の観点を加え、校内研修プログラム等を活用して校内研修を行う学校を「推進校」として指定した上で、全ての管内で「平成28年度発達障がい支援成果普及事業」を実施し、その成果を取組事例集としてまとめました。

御協力いただいた各学校の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、道内の全ての学校において本取組事例集が活用され、特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への指導や支援の一層の充実が図られるよう願っています。

【推進地域編】について

今日、発達障がい者の円滑な社会生活が促進されるよう、教育と医療、保健、福祉、労働等が連携し、発達障がい者への必要な支援を切れ目なく行うことが求められています。

北海道保健福祉部では、「北海道障がい福祉計画」を策定し、障がい児支援の充実を図るとともに、家族への支援として、保護者への相談支援や一般の方々が発達障がいについての理解を深めるための啓発等を行い、障がいのある方々やその御家族が安心して暮らすことができる地域づくりを進めているところです。

また、道教委では、平成26年度から27年度にかけて、文部科学省委託事業「早期からの教育相談・支援体制構築事業」を実施し、事業における推進地域の取組をリーフレット「市町村教育委員会における早期からの教育相談・支援体制の充実」にまとめ、全ての市町村教育委員会や学校に配付しました。

平成28年度は、保健・福祉分野と教育分野がそれぞれ進めてきた取組を、両者の連携した取組として発展させるため、道保健福祉部の「障がい児等支援連携体制整備事業」と道教委の「発達障がい支援成果普及事業」における「推進地域」を全ての管内において共通で指定し、その実践や成果を取組事例集としてまとめました。

事例を御提供いただいた各推進地域の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、道内の全ての地域において本取組事例集が活用され、地域における早期からの支援体制の一層の充実が図られるよう願っています。

第 1 部 [推進校編]

～校内研修プログラム、実践事例集を活用した3つの取組～

校内研修プログラム、実践事例集を活用した3つの取組

1 教員の専門性の向上

―校内研修の実践―

- 校内研修の年間計画の工夫 . . . 2
- 特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫 . . . 9
- 短い時間での活用1「校内委員会での活用」 . . . 13
- 短い時間での活用2「教科等の校内授業研究会での活用」 . . . 17
- 短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」 . . . 21
- 特別支援教育に関する研修会の実施 . . . 26

2 「全体への配慮」と「個別の支援」の充実

―学級づくり、授業づくりの実践―

- 校内環境、教室環境の工夫 . . . 31
- 掲示、板書等への配慮 . . . 37
- 静寂の時間の工夫 . . . 42
- 視覚支援の活用 . . . 45
- 個に応じた支援の工夫 . . . 50
- ICTの活用 . . . 57
- デジタル教科書やマルチメディアデイジー教科書の活用 . . . 62
- よさを認める工夫 . . . 66

3 保護者等との連携による一貫した支援の充実

―個別の指導計画・個別の教育支援計画の作成、活用の実践―

- 個別の指導計画の作成、活用 . . . 76
- 個別の教育支援計画の作成、活用 . . . 86

1 教員の専門性の向上 ―校内研修の実践―

1 教員の専門性の向上 －校内研修の実践－

はじめに

本項では、推進校において実践している「校内研修の年間計画の工夫」や「特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫」など、6つの項目で事例を掲載しました。

「校内研修プログラム」

校内研修プログラムの特徴

校内研修プログラムは、各学校において、全ての教職員が一貫した指導や支援を行うことができるよう、各学校の実態や教職員の状況などに応じて、自主的・主体的な研修に活用できるように作成した資料です。

例えば、

- ☐ 学校の実態に応じて、研修内容を選択する。
- ☐ 取り上げる回数や取り上げ方は、学校の実態に応じて決める。
- ☐ 短い時間で、負担感の少ない研修となるよう工夫する。
- ☐ 実施した研修の成果を検証し、次年度の研修につなげる。

研修内容ごとの「研修シート(試案)」の活用

校内研修プログラムの研修内容ごとに示した「研修シート(試案)」を活用することができます。

その際、

- ☐ まずは試行的に研修シート(試案)をそのまま活用し、効果を確認する。
- ☐ 研修シート(試案)を参考に学校独自の「研修シート」を作成する。
- ☐ 研修シートに記載した内容に基づき改善を図りながら、繰り返し使う。

などの活用が考えられます。

ポイント

・研修結果を日々の指導や年間の研修計画等と関連付ける。

推進校における校内研修の実践は、特別支援教育に関する内容の研修を通して、日々の授業改善や児童生徒等への指導や支援について検討する取組であり、推進校が「実践の成果」として挙げているように、教職員間の共通理解につながりました。

また、推進校で実施しているように、研修の年間計画に研修内容や成果等を記載することは、それぞれの研修項目の意味付け、価値付け、関連付けが明確となり、効果的な研修の実施につながりました。その結果、外部の関係機関との連携等も含めた校内体制を構築することができました。

校内研修の年間計画の工夫①

幼稚園

諸会議に合わせて短時間での
研修を計画した取組

活用した資料

校内研修プログラム P 4

ー校内研修プログラムの年間の活用例ー

○ 実践の概要

研修の年間計画

	内 容	校内研修プログラムの活用
4 月	実態把握や支援方法を検討し、指導や支援の留意点を考える	I - 2 「実態把握、支援方法の検討」
5 月	発達障がいのある子どもの活動の困難さを体験し、その心理や指示の在り方考える	I - 1 「発達障がいの特性の理解」
6 月	個別の指導計画を作成し、指導や支援の見通しをもつ	II - 1 「個別の指導計画の作成」
7 月	発達障がいのある子どもへの配慮を含めた学級づくりの取組を交流し、指導上の課題や解決の方向性を整理する	III - 1 「学級づくり 教師の言葉がけ」
8 月	園全体での取組とともに、発達障がいのある子どもへの指導や支援の在り方を検討する	III - 3 「校内の連携」

本園では、ケース会議や職員会議終了後、放課後の時間などを利用し、短時間で研修シートを活用した研修や演習等を行いました。

○ 実践の成果

年間を通した短時間の効果的な研修は、全教職員の発達障がいの特性や対応についての理解につながりました。その結果、日常の保育を通して、支援内容の見直しや手立ての具体的な改善を行うことができました。

校内研修の年間計画の工夫②

小学校

研修の年間計画に特別支援教育の研修を位置付けた取組

活用した資料

校内研修プログラム P 4

ー校内研修プログラムの年間の活用例ー

○ 実践の概要

研修の年間計画

	内 容
4 月	・ 今年度の年間研修計画について全体提案
5 月	・ <u>個別の指導計画の作成について</u>
6 月	・ 発達障がいのある児童への支援方法について ・ 道徳の授業について
7 月	・ 指導案事前検討、授業実践交流 ・ 第 1 回校内授業研究会、事後検討会 ※ 5 月の研修内容を踏まえて作成した <u>個別の指導計画を活用して、通常の学級において、個別の支援を行う。</u>

本校では、校内研修の年間計画に「個別の指導計画の作成」や「発達障がいのある児童への支援方法」など、校内研修プログラムの研修項目を位置付け、校内研修を行いました。

特別支援教育の内容を年間通して位置付けることにより、全ての指導場面において、特別支援教育の視点を意識できるようにしました。

○ 実践の成果

こうした取組をはじめる前は、それぞれの教職員の特別支援教育に関する意識や知識・技能等に差が見られましたが、研修を継続することによって、授業場面等において、特別な教育的支援が必要な児童に、一貫した支援が行われるようになりました。

校内研修の年間計画の工夫③

小学校

年間を通じて
ミニ研修を行った取組

活用した資料

校内研修プログラムP24
－教師の言葉がけ－

○ 実践の概要

4月のミニ研修

好ましくない教師の言葉がけ	教師の好意に満ちた言葉がけ
「またA君か。誰かがけがしたら、どうするの。危ないって言ったでしょ!」	「みんなで仲よく遊ぶためにはどうしたらよいか、先生と一緒に考えてみよう。」
「早くしないと間に合わないよ。」	「時間に間に合うように、少しだけ準備するスピードを上げてみよう。」
「ちゃんと片付けなさい。」	「はさみとのりは、道具箱の中に片付けようね。」

本校では、「きめ細かな手立ては、全ての児童に有効である」という考えのもと、校内研修プログラムを活用し、研修を行いました。

研修は、教職員が参加しやすいように、1回の研修を30分程度の「ミニ研修」として実施しています。全教職員が、全ての児童に「配慮」と「支援」ができるよう、研修の充実を図っています。

本実践の「好意に満ちた教師の言葉がけ」も、その研修の一つであり、短い時間の研修を繰り返すことによって、年間を通して、特別支援教育の視点を意識できるようになりました。

○ 実践の成果

研修を通して、

- ・「好意に満ちた言葉がけは、実際の場面でも使いたいと感じた。」
- ・「言葉がけの大切さを改めて実感した。」
- ・「児童に、これまで以上に丁寧にかかわりたい。」

などの感想があり、児童への言葉がけの在り方を考える研修を通して、全体への支援の充実につながりました。

校内研修の年間計画の工夫④

小学校

特別支援教育に関する内容を
年間にわたって継続した取組

活用した資料

校内研修プログラムP 4
 ー校内研修プログラムの年間の活用例ー
 実践事例集全般

○ 実践の概要

	時 期	内 容	成 果
校内研修 プログラム	4 月	実践事例集を活用した授業づくりと合理的配慮についての学習会	合理的配慮を盛り込んだ環境整備や授業づくりへの理解を深めることができた。
実践事例集	11月	個別の指導計画を生かした教室環境等の整備についての研修	合理的配慮の視点で、環境面への配慮を確認し合うことができた。
校内支援委員会	7 月、11月 (随時)	事前に「学びの支援委員会」で話題に挙がった児童の指導方針について全教職員で確認	一人一人の児童の実態について共通理解を図ることができた。
特別支援教育 パートナー・ ティーチャー 派遣事業	年 4 回	特別支援学校教職員による特別な教育的支援を必要とする児童に対する年数回の授業観察、学級担任との面談の実施	特別支援学校の教職員の助言により、指導の充実を図ることができた。
特別支援教育 に関する研修	4 月、5 月、 8 月、1 月、 3 月	「学びの支援委員会（年 5 回）」を実施し、一人一人の児童について、全教職員で実態の交流やケース検討（合理的配慮と検査結果の考察など）を実施	児童への支援の在り方や個別の教育支援計画の作成について、全教職員で共通理解を図り、日常の実践に生かすことができた。

本校では、上記のように、特別支援教育に関わる研修を年間計画に位置付けて取り組んでいます。

○ 実践の成果

「学びの支援委員会」、「校内支援委員会」、「特別支援教育に関する研修」を関連させて研修を進めた結果、児童の実態に応じた支援について、教職員間の共通理解を図ることができました。

また、校内研修プログラムや実践事例集を活用した研修等を通して、学校全体で「チーム」としての一貫した支援の在り方を確立することができました。

校内研修の年間計画の工夫⑤

中学校

特別支援教育に関する内容を
年間にわたって実施した取組

活用した資料

校内研修プログラム P 4

ー校内研修プログラムの年間の活用例ー

○ 実践の概要

	時 期	内 容	成 果
校内研修 プログラム	4 月	校内研修プログラムの シートを活用した実態把握	全教職員の理解が進み、日々の授業実践に生かすことができるようになった。
	通年	板書での工夫点や配慮 事項を全校で共有した授業実践	生徒が学習への見通しをもち、主体的に学習することができるようになるとともに、安心感をもって学習することができるようになった。
校内支援委員会	年 7 回	校内研修プログラムを 活用した実態把握に基づ く、特別な教育的支援を 必要とする生徒の個別の 指導計画の作成	指導や支援の具体的な手立てやか かわり方、配慮についての共通理解 が図られ、全教職員が同じスタンス で指導や支援を行うことができた。
特別支援教育 パートナー・ ティーチャー 派遣事業	年 3 回 10月、2 月	授業における生徒の観 察やケース会議を通し て、障がいの程度に応じ た適切な指導や支援の在 り方についての助言	小学校と中学校の連続性を踏まえ た個別の教育支援計画の整備が進 み、保護者の理解を得ながら指導や 支援の充実を図ることができた。
特別支援教育 に関する研修	12月、1 月	高等支援学校の視察、 通常の学級における特別 支援教育についての研修 の実施	就労を見通した指導や支援の在り 方や発達障がいに関する理解が進 み、日常の指導や支援の充実を図る ことができた。

本校では、上記のとおり、特別支援教育に関わる研修を年間計画に位置付けて取り組んでいます。

○ 実践の成果

年間を通して計画的に特別支援教育に関わる研修を実施したことにより、全教職員が、特別支援教育の基本的な知識や技能等についての理解を深めることにつながりました。

その結果、学校として、特別な教育的支援を必要とする生徒への一貫した指導や支援の充実を図ることができました。

校内研修の年間計画の工夫⑥

高等学校

特別支援教育に関する内容を
年間にわたって実施した取組

活用した資料

校内研修プログラム P 4

ー校内研修プログラムの年間の活用例ー

○ 実践の概要

	時 期	内 容	成 果
校内研修 プログラム	4 月、 12 月	「教科学年生活会議」における入学生徒の情報共有（中学校からの引継ぎ内容）と個別の指導計画の確認、教育局の特別支援教育スーパーバイザーによる助言	一人一人の生徒の学習、学校生活の状況について全教職員で情報共有を図ることにより、指導の方向性を確認することができた。学級担任のみならず、それぞれの教職員が必要な場面で支援を行うことができています。
	7 月	授業づくりと教室環境整備（公開授業「ユニバーサルデザインを意識した分かりやすい授業」、特別支援教育パートナー・ティーチャーによる助言）	ユニバーサルデザインを意識した授業づくりについて公開授業を実施し、特別支援教育パートナー・ティーチャー派遣事業による特別支援学校のコーディネーターからの助言により、特別な教育的支援を必要とする生徒の対応について理解が深まった。
校内支援委員会	月 1 回	特別な教育的支援を必要とする生徒の実態把握と情報交流 個別の指導計画の作成に関わる検討	一人一人のケースについて情報交流を行い、支援の方法を検討することができた。
特別支援教育パートナー・ティーチャー派遣事業による特別支援教育に関する研修	年 3 回	授業参観による生徒観察や、教科指導への助言、学級担任との面談、個別の指導計画の作成への助言、対象生徒の対応について	専門的立場からの助言により、生徒理解と進路指導等について理解を深めることができた。個別の指導計画に基づく指導・支援及び配慮について検証することができた。

本校では、上記のとおり、特別支援教育に関わる研修を年間計画に位置付けて取り組んでいます。

○ 実践の成果

特別支援教育に関する内容を年間にわたって実施したことにより、教職員の特別支援教育に関する意識が高まりました。その結果、中学校から引継ぎを受けた個別の指導計画に基づき、学力不振や不登校等の課題があった生徒にも教職員で共通理解を図り、一貫した支援を行うことができました。また、校内研修を通じた授業改善等を行い、指導や支援の充実を図ることができました。

校内研修の年間計画の工夫⑦

高等学校**研修の年間計画に特別支援教育
の研修を位置付けた取組****活用した資料**

校内研修プログラム P 4

ー校内研修プログラムの年間の活用例ー

○ **実践の概要**

	内 容
4 月	特別支援教育校内委員会において特別な教育的支援の必要な生徒の把握
5 月	中高一貫推進委員会特別支援部会の実施
6 月	教材・教具の工夫と改善
7 月	特別支援教育パートナー・ティーチャー派遣事業による助言
8 月	特別支援教育に関する先進地域の視察

本校では、年間を通して月に1度、特別支援教育に関する研修を行い、教職員の理解・啓発を図りました。特別支援教育コーディネーターが中心となって校内研修を企画し、充実を図りました。

○ **実践の成果**

特別支援教育校内委員会を通じて組織的に研修に取り組んだことにより、

- ・モニターやスクリーンの活用
- ・フラッシュカードや単語カルタの活用
- ・マス目ノートの活用
- ・音楽・音声教材の活用

など生徒の実態に応じた教材・教具の工夫等、適切な指導や支援につながりました。

特別支援教育校内委員会とは

校内における特別支援教育に関する支援体制を整備するための委員会のことで、学習面や行動面で特別な教育的支援が必要な児童生徒の実態把握を行い、支援方策等を検討します。

特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫①

幼稚園

教職員の思いを共有する取組

活用した資料

校内研修プログラムP59

ー研修成果の検証ー

○ 実践の概要

◎発達障がいのある子どもへの指導や支援についてお答えください。

		〈○で記入願います〉			
		十分 している	少し している	あまりし ていない	全くして いない
1	発達障がいの特性について理解していると 思いますか。				
2	学前に在籍し支援を受けている園児以外に もニーズがある子を把握していますか。				
3	支援児の理解(実態把握)と支援方法への 検討は行っていますか。				
4	個別指導計画の作成について適切に行っ ていますか。				
5	個別の教育支援計画(短期的)の作成につ いては適切に行っていますか。				
6	発達障がいのある子への配慮を含めた学級 づくりについて				
	①指導や支援について				
	②教師の意識がけについて				
	③園の障害の理解について				
7	発達障がいのある子への配慮を含めた授業 づくりを行っていますか。				
8	園内の連携については行われていると思 いますか。				
9	個別の指導計画の見直しなどが適切に行 われ活用されていると思いますか。				
10	個別教育支援計画(短期的)の見直しなど が適切に行われ活用されていると思いま すか。				
11	その他 発達障がいのある子への指導について、気がかかることや実践してみたいことなどがあり ましたら記入ください。				

教職員に実施したアンケート

本園では、特別支援教育に関する教職員の実態を把握するためのアンケートを実施したところ、「特別な教育的支援の必要な子どもへの理解」、「個別の指導計画の作成」の項目については「十分している」の回答が多く見られました。

一方、「発達障がいの特性の理解」と「園内の連携」、「学級づくりや授業づくり」については、「少ししている」という回答が多く見られました。

そこで、教職員の研修のニーズに合わせて必要な項目から取り組むことができる校内研修プログラムを活用して研修を進めたことにより、発達障がいへの理解が促進され、課題等について共通理解を図ることができました。

○ 実践の成果

本実践では、教職員による評価を大切にしながら共通理解を図り、校内研修に取り組んでみました。

その結果、研修の振り返り場面では、「園内において、連携のとれた指導を行うための具体的な手立てについて研修を進めたい」などの感想が出されたことから、取組に対して前向きな思いがあることを把握することができました。

特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫②

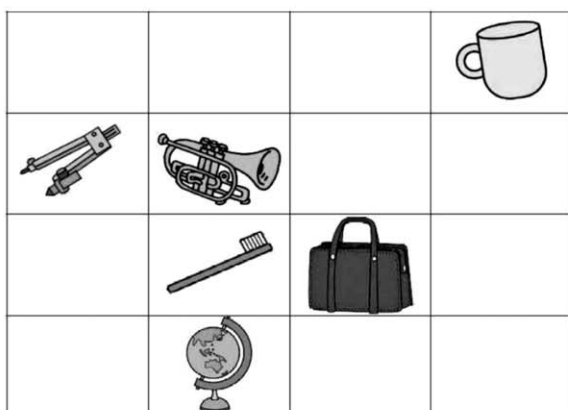
小学校

特別な教育的支援を必要とする 児童の気持ちを理解する取組

活用した資料

校内研修プログラム P 60
ー 幼稚園の疑似体験用 ー

○ 実践の概要



本校では、校内研修プログラムを用いて年間2回、障がいの特性を理解することを目的としたワークショップを行いました。演習では、校内研修プログラムを活用して、次の手順で研修を実施しました。

【特別支援に関する研修】

[5月]…本事例

・「障がいの特性の理解」

[12月]

・「校内の連携」

【演習1】

- ① 児童役の教職員が上記のイラストを5秒間見て、6つの物の配置を覚える。
- ② 上記のイラストを見ないで、マス目だけ描かれた紙に、覚えたイラストを正しい位置に描く。

【演習2】

- ① 説明役の教職員が、6つの物がどこにあるかを言葉で伝える。
- ② 児童役の教職員は、説明を聞いて、覚えたイラストを正しい位置に描く。



校内研修の様子

○ 実践の成果

演習に参加した児童役の教職員から、「イラストが鮮明に思い出せない」、「言葉だけの説明は、理解しにくい」という感想があり、発達障がいの有無にかかわらず、情報処理を行うときには、一人一人によって視覚や聴覚に優位性があることを感じることができました。また、演習を通して指示を理解できない児童の気持ちに気付くことができ、「簡潔な指示」、「話す速度」、「視覚支援」の大切さについて教職員で共通理解を図ることができました。

特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫③

高等学校

「日常の言葉がけ」を「好意に満ちた言葉がけ」に変える取組

活用した資料

校内研修プログラムP50

－教師の言葉がけ－

○ 実践の概要



タブレット端末を活用した研修の様子

本校では、校内研修において、学年ごとのグループで検討した「好意に満ちた言葉がけ」をタブレット端末のアプリを使って入力し、プロジェクターで全体に表示して共通理解を図りました。

また、「好意に満ちた言葉がけ」を日常的に意識して言葉がけを行う強化期間を2週間設定し、各教職員の取組と効果について明らかにするために、事前、事後のアンケートを実施しました。

その結果、85%以上の教職員が実践し、実践した教職員からは、効果を感じたとの感想が得られました。

○ 実践の成果

研修に関するアンケートを教職員に実施したところ、研修内容の理解度も高く、実際に「好意に満ちた言葉がけ」を実践する教職員が増えたことが分かりました。また、普段から「好意に満ちた言葉がけ」を意識して生徒に行動を促した結果、教師と生徒の間に和やかな雰囲気と良好な関係を築くことができるようになりました。

本実践を行ったことにより、生徒の主体的な行動が多く場面で見られるようになりました。

タブレット端末のアプリケーションには

作成したカードを線でつなげるだけで伝わりやすい順番に並べられるなど、短い時間で自分の考えをまとめることができるアプリがあり、授業で活用できるものもあります。中には、テレビのクイズ番組のように、全員の回答を指導者の端末に表示することができる機能が付いているものもあります。

特別支援教育に関する内容を年間計画に位置付ける工夫④

高等学校

「発問」について検討する取組

活用した資料

校内研修プログラムP45

－発達障がいの特徴の理解－

○ 実践の概要

演習1

※演習例

① 教師役が、次のような長い文章を早口で説明します。

明日は札幌の円山公園に出かけます。7時45分にJR「余市」駅に集まってください。
余市駅発8時18分の列車に乗り、札幌駅着が9時31分、到着後は、地下鉄南北線、東西線乗り継ぎ、円山公園駅下車、バスセンターまで歩き、そこから西15番動物園線、円山西町2丁目行きのバスに乗ります。円山動物園前で下車すると、すぐそこに動物園の入り口があります。
動物園に入るときは、私が皆さんに、動物園の地図と入場券を配ります。・・・

② このあと、教師役が子ども役に質問をします。

- ・余市駅を何時の列車に乗りますか。
- ・地下鉄はどこで降りますか。
- ・何番線のバスに乗りますか。
- ・動物園まではどこ行きのバスに乗りますか。など

教職員からの感想

- 情報が正しく伝わらない
- 途中から聞き取れることを諦めてしまう
- 記憶に残りにくい
- 聞いている間、常に緊張状態が続く

校内研修プログラムを活用して、発達障がいのある生徒の学習の困難さを体験し、説明方法、発問方法等について検討を行いました。

生徒役の教職員からは、上記のような感想が挙がるなど、生徒の心情を理解した意見が出されました。

○ 実践の成果

研修を通じて、発達障がいのある生徒の学習の困難さに対して、3つの配慮事項を確認しました。

このように、分かりやすい説明を教職員が心がけたことは、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援だけでなく、全体への支援の充実につながりました。

授業場面における3つの配慮事項

- ① 説明だけの場合は、項目に分ける。
- ② 理解の状況について、必要に応じて確認しながら話す。
- ③ 箇条書きの資料（チェックシート等）を用意し、事前に配付する。

短い時間での活用1 「校内委員会での活用」①

小学校

誰が、どの時間に、どこで支援するかを明確にした取組

活用した資料

校内研修プログラムP28
－校内の連携－

○ 実践の概要

学級担任が把握している情報を個別の指導計画に反映して、教職員の共通理解を図り、誰が、どの時間に、どこで支援するかについて整理しました。

	学級担任	副担任	学習支援員	養護教諭	コーディネーター
登校時	○	△			△
授業中	○	△	△		
休憩時間		○		△	
給食 清掃		○	△		
下校時 放課後	○	△			△
クラブ活動	△	○			

「○」は中心となってかかわる教職員、「△」は補助的にかかわる教職員として示し、校内での共通理解を図りました。

○ 実践の成果

校内研修を充実させることで、複数の教職員が、特別な教育的支援を必要とする児童への支援の必要性に気づき、教職員の特別支援教育への意識が高まりました。

「○」や「△」などの記号を用いて、役割分担したことにより、一目で自分の役割を確認することができました。また、活動時の様子を誰に引き継ぐとよいのかが分かりやすくなり、一貫した支援につながりました。

短い時間での活用1「校内委員会での活用」②

中学校

15分程度の時間で
互いの実践を交流した取組

活用した資料

校内研修プログラムP36

—指導や支援—

○ 実践の概要

平成28年11月17日

第6回支援委員会(報告)

学習係

1. 生徒の授業での様子
下記

2. 具体的な学習支援について
〇〇一授業中の様子などを伝えてもらえらる。保護者に支援依頼の時に限っては警戒されているようだ。数学のコンパスに関しては、早急に連絡し、授業に支障のないように準備してもらう。期末テスト終了後連絡を取り、今の現状を(良くなったことや学校での取り組み等も含め)伝える。
〇〇一学習支援に当たる以前の授業、家庭のことと深く関係しており、担任を中心に生徒指導委員会や方向性を考えていく。ただし、遅れている状態をそのままにせず声をかけていくこと。

3. 当面の支援委員の配置
数学、英語を中心とするが家庭科の実習時は入っていく。

4. その他
支援が必要な生徒に関して、効果がない、やっとなかなか等々をそのままにするのではなく、具体的な手立てを継続していく。星休み等を使い、教員先生が学習支援を行う予定。

12月の支援委員会までに各教科担任も2学期で実習したこと等を記入する。

コーディネーターから

本校では、特別な教育的支援を必要とする生徒の実態について、発達障がいの特徴からも捉えてみる必要があると考え、校内委員会を定期的開催しながら生徒の様子について情報交流を行い、その対応について協議しています。

具体的には、生徒一人一人への指導や支援、その結果などについて交流を図り、一貫した支援の在り方を検討しています。

その際、授業場面での支援だけではなく、学級担任との連携の中で、特別な教育的支援を必要とする生徒の保護者の願いを大切にしながら今後の方向性についても確認しています。

氏名	教科	支援してほしいこと
□□ ○○	数学	
	英語	わからないことは聞かず、自分から聞くこともできている。机上の整理ができていない。教科書類がすべて置かれているのでその都度整理するよう声をかけている。
× × △△	数学	時間がかかる事に変化なし。音では理解できているがスベルでおこなうものが多い様子。一度説明をすると、課題に取り組み始める事が増えた。時間内に写せなかったものや分からない時は、隣の席の児童が優しく手助けしている。
	英語	(10月)計算に取り組むときは付きっきり。以前よりも紙書は写そうとしているが完全ではない。側で支援しているときでも保つことがある。 (11月)定規でまっすぐな線を引くことが難しい。コンパスは補助が必要。コンパスには鉛筆がないままなので、使うときにシャープペンで付けていて効率が悪い。定規は木製のものが一本しかない。
○○ △△	数学	(10月)学期に入り、復習の量はほとんど変わらない。一つずつ具体的な説明や復習は必要だが、こちらからの紙書を写す役はしなくても取り組んでいる。個別学習を始めたが、きちんと提出できていない。 (11月)個別学習・家庭学習を通して、アルファベットで大文字・小文字、自分の名前が書けるようになった。繰り返しが必要。単語としてスベルに起こすのはまだ不十分だが、音での変換はできるようになってきている。
	英語	できないからやらずも出ず手が動かないように見える。類似問題でも一問ごとに繰り返し説明が必要。 自信が持てない様子。こちらからの問いにも小さい声で答えている。励ましの声かけが必要。本人からの訴えで個別学習を始めたが、きちんと提出してきている。

○ 実践の成果

本実践を通して、特別な教育的支援を必要とする生徒は、授業への参加意欲が高まり、自ら個別の学習会に参加するようになりました。また、保護者と連携することにより、学級担任は、保護者に対して家庭でのかわり方について具体的に伝えることができるようになりました。

短い時間での活用 1 「校内委員会での活用」③

中学校

15分程度の時間で 互いの実践を交流した取組

活用した資料

校内研修プログラム P24
－教師の言葉がけ－

○ 実践の概要

日常の言葉がけ	好意に満ちた言葉がけ
片付けなさい！	使った物はきれいにしようね。
また、忘れたの？	昨日、チェックしましたか？
さっき説明したでしょ！	もう一度説明しますね。
（美術の時間に）早く塗りなさい！	ここは何色を塗りたいの？

【振り返り】

- ・教職員の言葉によって、生徒が気付いたり、活動に一步踏み出すきっかけになったりすると感じた。
- ・生徒に期待を込めて話すようにしていきたい。
- ・教職員として自分の感情を一度抑え、「好意に満ちた言葉がけ」に言い直す心の余裕がもてるよう日頃から意識することが大切である。
- ・主語を「あなた」から「私」に置き換えることで、教職員の意識が変わり、自然に「好意に満ちた言葉がけ」になる場合が多い。

本校では、15分程度の時間を校内研修として位置付け、特別支援教育に関する研修を行っています。効率的に研修が行えるよう、ワークシートを用いて互いの実践（生徒への言葉がけ）について交流しました。

○ 実践の成果

全教職員が、短時間で生徒への言葉がけについての研修を行い、普段の生徒への言葉がけを振り返り、対応について検討したことにより、共通理解を図ることにつながりました。

ワークシートを用いたことにより、それぞれの教職員が研修後に、自分自身の実践を振り返るとともに、他の教職員の実践を参考にすることにつながりました。

短い時間での活用1 「校内委員会での活用」④

高等学校

生徒の実態を一覧にまとめ、
共通理解を図った取組

活用した資料

校内研修プログラムP51
一障がいの理解ー

○ 実践の概要

日常場面で特別な支援や配慮が必要と考えられる生徒の状況

＜区分方法＞ 学習面・・・読書き、計算、推論、聞く、話すなど。低学力など。 行動面・・・不注意、多動性や衝動性など。 社会性・・・対人関係、こだわり、生活習慣など。 身体面・・・アレルギー、感覚器官の異常、アトピーなど。	＜段階＞ 段階A：補足的、集中的または柔軟な形態による特化した指導が必要となる。 段階B：通常の学級内で補足的な指導が必要となる。 段階C：通常の学級内でまれに補足的な指導が必要となる。 段階D：通常の学級内で効果的な指導が行われている。	＜チェック機関＞ ・年次情報 ・養護教諭 ・委員会にて
---	--	---

年・組	氏名	学習面	行動面	社会性	身体面	段階	病状と具体的な状況等	留意点・手立て等
3 A	〇〇太郎	○	○			A	・アスペルガー症候群の診断を受けている。 ・落ち着きがなく私話も見られるが、活動の内容を理解すると落ち着いて取り組むことができる。 ・当該生徒の活動を制止する言葉や注意する言葉に敏感である。 ・家庭環境が落ち着かず、第2学年の当初から不安定な面が見られる。 ・第3学年になり、落ち着いて学習に取り組めるようになってきた。	【効果的なかわり】 ・アイコンタクトをしながら説明することで、落ち着くことが多い。 ・単純作業は得意であり、称賛する場面として適している。 【避けた方がよいかわり】 ・頭ごなしの言い方は苦手としている。 ・身体接触は苦手としている。

本校では、校内研修プログラムを活用し、日常場面における特別な教育的支援を必要とする生徒にかかわる情報について、学習面、行動面、社会性、身体面の観点で、一覧にまとめるとともに、有効な手立てを具体的に記載することにより、教職員の共通理解を図ることに努めています。

一覧には、どの程度の支援（一斉授業の中で見守り、個別指示、個別指導など）が必要なのかを区分し、4つの段階で記載することにより、一人一人の教育的ニーズに応じた一貫した支援が行えるよう工夫しています。

○ 実践の成果

支援内容を簡潔に整理した一覧を作成することにより、全教職員で生徒理解を進めることができました。

有効な手立てを一覧に具体的に記載し、短い時間を活用して繰り返し共通理解を図るようにしたことにより、授業実践にも活用しやすい情報共有シートとなりました。

短い時間での活用2「教科等の校内授業研究会での活用」①

幼稚園

効果的な教師のかかわりについて共通理解を図る取組

活用した資料

校内研修プログラム全般

○ 実践の概要

叱り方のレベルと押さえ	場 面	対応の仕方
レベル1. リスレベル ☆不注意や間違いなど すぐに改善できるとき	- 不注意による行動（間違えてしてしまったこと） - 無意識で行っていること、まだ身に付いていないこと（マナーなど） - 自分の思いを我慢できない	◎適切な行動を知らせる。 ◎課題となる行動が何度も続くときはソーシャルスキルトレーニングなどを併せて活用する（視覚支援も併せて行う）。
レベル2. キツネレベル ☆できることをしないとき	- 故意に、してはいけないことをする - 片付けや順番などのルールを守らない - 学級の活動や行事の場面でふざけ、落ち着いて行動できない - 人のせいにしたり、嘘をつく	◎自分の行動を客観的に認識させる。 ◎何故そうしたのかを聞き取り、適切な行動を確認する。 ◎できている周りの幼児を褒める。 ◎ルールを守れないことについて、守れるような状況をつくる。
レベル3. クマレベル ☆心や体を傷付けたとき	- 友達に手を出す（叩く、押す、かじるなど） - 危険な行動をとる（高い所に登る、物を投げるなど） - 言葉や行動で人の心を傷付ける（嫌な言葉、仲間外れなど）	◎学級全体で話し合う。 ◎危険なことは具体的にはっきりと伝える。 ◎謝った後の、今後の適切な行動まで明確にする。 ◎自分の姿を客観的に見せる。

特別な教育的支援を必要とする子どもは、これまでの失敗経験等により、気持ちの落ち込みが激しい場合もあり、叱らなければならない場面や正しい行動を伝える場面などの対応について教職員間で研修を行う必要がありました。

そこで、本園では、具体的な場면을想定しながら、効果的な教職員のかかわりを全教職員で話し合い、園内の共通の押さえとして「対応の共通理解」の表を作成しました。

○ 実践の成果

子どもへのかかわり方について共通理解したことで、教職員間でその場面が叱り方のどのレベルに当たるのか、考え方や対応の違いについて様々な意見を交流し、指導や支援の考え方や方法を見直すことができました。

短い時間での活用2「教科等の校内授業研究会での活用」②

小学校

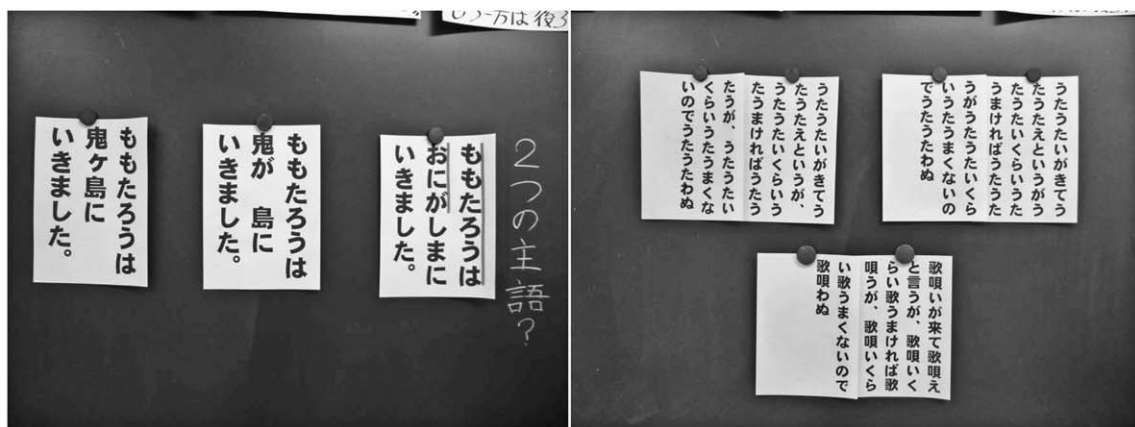
分かりにくい表現を 分かりやすく工夫する取組

活用した資料

校内研修プログラムP19

一発達障がいの特性の理解ー

○ 実践の概要



板書の分かりやすさについて検討する演習

本校では、特別な教育的支援を必要とする児童の気持ちを疑似体験することを通して、分かりやすい表現方法などについて検討しました。

研修を進めるに当たっては、疑似体験の感想等を交流した後に、特別支援教育コーディネーターが、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童の感じ方や気持ちについて解説することにより理解を深めています。

その際、指導や支援の手立てについて意見を出し合うことで、具体的な方策を検討するようにしています。

○ 実践の成果

授業研究会において、「分かりやすい表現」を取り上げたことにより、教職員から、

- ・「情報が多いと集中できない児童が在籍しているため、掲示物を工夫する必要がある」
- ・「視覚的な指示や情報が重要だと感じた」

などの感想があり、学校全体で分かりやすい授業づくりに取り組むきっかけとなりました。

短い時間での活用2「教科等の校内授業研究会での活用」③

中学校

教科等の担当者が 生徒への支援を検討する取組

活用した資料

実践事例集P27

－個別の指導計画を生かした支援－

○ 実践の概要



情報交流会の様子

本校では、生徒が「今できそう」、「少し頑張ったら到達できそう」など、「1か月程度で達成できる短期目標」及び「短期目標を達成するための具体的な手立て」について検討しています。

他教科の短期目標を、教職員が互いに理解し、学習活動全体を通して、生徒の努力を見取ることができるよう取組を進めています。

具体的には、毎週、特別支援教育コーディネーターや生徒指導部長、学級担任、教科担任、学習支援員等が集まり、複数体制で生徒の「できたこと」や「よかったこと」を中心に情報交流し、次の週からどのようなところに視点を当てて見ていくか、また、どのような指導や支援を行っていくかなどについて確認しています。

○ 実践の成果

本実践では、個別の指導計画を用いて優先すべき課題を焦点化し、当該生徒の成長を確認しながら目標や手立ての検討及びその見直しを行ったことにより、最適な支援方法を検討することができました。

また、当該生徒は、自分の努力や成果を実感し、様々な学習活動に主体的に取り組む姿が見られるようになりました。

短い時間での活用2「教科等の校内授業研究会での活用」④

高等学校

年度初めに共通理解を図る場を設定する取組

活用した資料

校内研修プログラムP47

－個別の指導計画の作成－

○ 実践の概要

困難さやつまずきのチェックシート（一部抜粋）

<学 習 面>

具体的な困難さやつまずき		ない・時々ある・ある		
		0	1	2
聞くこと	ことばの聞き間違いがある(例「知った」を「行った」と聞き間違える)。			
	話の内容を聞き漏らすことがある。			
	個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい。			
	指示の理解が難しいため、とまどったり行動が遅れたりする。			
	HRや会議等で、話し合いがうまくできない(話し合いの流れが理解できない)。			

<行 動 面>

具体的な困難さやつまずき		ない・時々ある・ある		
		0	1	2
不注意	勉強や様々な活動で、細部への注意を払わなかったり、不注意な間違いをする(正確性に欠ける、見直しをしない、細かな作業が苦手である等)。			
	学習課題や活動で、注意を集中し続けることが困難である(長い時間ひとつの課題に集中することができない、ことばのキャッチボールをすることが困難)。			

<対人関係面>

具体的な困難さやつまずき		ない・時々ある・ある		
		0	1	2
人への関わり の困難さ	身振りやジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションが苦手である。			
	友達とうまくやりたいという気持ちはあるが、友達関係をうまく築けない。			
	一人でいることが多く、友達と一緒に過ごすことがほとんどない。			
	仲のいい友達が少なく、他の生徒からいじめられることがある。			
	レクリエーションやグループ活動をするとき、友達と協力して活動することが困難である。			
	そのときの場面や、相手の感情を理解して話すことが難しい。			
	他人の気持ちを共有することや共感することが難しい。			
	周りの人が困惑するようなことも、遠慮しないで言うてしまう。			

本校では、「困難さやつまずきのチェックシート」を活用し、「学習面」、「行動面」、「対人関係面」の3観点について、具体的な状況等を確認した後、全教職員で生徒一人一人の実態を把握しています。チェックシートは、校内授業研究会等の場面で活用し、生徒の特性や対応について共通理解を図っています。

○ 実践の成果

「困難さやつまずきチェックシート」を活用したことにより、生徒の学習面や生活面での困難さを早期に発見し、生徒の実態や指導方法等について共通理解を図ることができました。その結果、生徒一人一人の特性に応じた支援の充実につながりました。

短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」①

小学校

校内連携を促進する取組

活用した資料

校内研修プログラムP41

－校内の連携－

○ 実践の概要

本校では、学力面の困難さはないものの幼児期から不安が強く、環境の変化への適応が難しいなどの要因から、教室に入れないこともある児童への対応について校内研修プログラムを活用して、共通理解を図りました。

運動会前：学年団（ブロック）交流 資料

ねらい：指導上、特別な教育的支援を必要とする児童について、学級における対応から、学校全体の組織的な対応としていくため、教職員一人一人が時間帯や場面によって、どのようにかわるかについて検討する。

	学級担任	学習支援員	隣接学級 学年団	教務主任等	養護教諭
登下校時				教室に入れ るよう支援	玄関で出 迎え
授業中	他の児童と 同様の対応				
休憩時間					
運動会の練習		遊戯練習の 補助	好意に満ちた 言葉かけ	練習場所へ の誘導	
その他の活動	学習予定を 伝える				

○ 実践の成果

当該児童は、初めて行う取組を苦手とするため、運動会の遊戯の練習が始まった当初は、学年全体の練習で踊ることが難しかったが、何度か個別に練習をすることにより、活動への見通しがもてるようになり、踊り方が上達しました。

その結果、運動会の当日は、他の児童と一緒に踊ることができるようになりました。

短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」②

中学校

校内連携を促進する取組

活用した資料

校内研修プログラムP41

－校内の連携－

○ 実践の概要

	学級担任	副担任	支援員	教科担任	コーディネーター	養護教諭	スクールカウンセラー
登校時	体調の確認					体調不良を訴えたときは、できるだけ、対話	
授業中	必要に応じて支援		授業場面での支援	必要に応じて支援		するように心がける。	
休憩時間		休み時間の様子を把握			適宜、声をかける		
給食清掃	給食時間の様子を把握		必要に応じて支援				
下校時 放課後	翌日の予定を確認						カウンセリング

本校では、特別な教育的支援を必要とする生徒への指導や支援の充実に向けて、校内研修プログラムに掲載されている上記シートを活用しました。

各場面において、当該生徒にかかわる教職員の役割として、「いつ」、「どこで」、「誰が」、「どのように」にかかわるのかを確認して、校内全体で共通理解を図りながら指導を行いました。

○ 実践の成果

上記シートを活用し、教職員の役割を明確にしたことにより、当該生徒へのかかわりが一部の教職員に偏っていることが分かりました。

そこで、校内の連携を見直し、特別な教育的支援を必要とする生徒への指導や支援については、複数の教職員で行うとともに、一人一人の生徒へのかかわりについて、学校全体で共通理解することができるようになりました。

短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」③

中学校**生徒へのアンケート結果を
踏まえた取組の実施****活用した資料**

校内研修プログラムP59

－研修成果の検証－

○ 実践の概要

生徒用のアンケート用紙

主なアンケートの内容	とてもそう思う	そう思う	思わない
学校では物の収納場所などがはっきり決められていますか？			
授業の内容は、話すだけでなく、プリントや掲示物、テレビモニターや板書などで工夫されていますか？			
知りたいことがあったときに見て分かるように掲示物が工夫されていますか？			
先生方は、自分のよさを認めたり、気付かせてくれたりしますか？			

本校では、生徒指導部と研修部が連携して企画した「生徒指導交流会」を実施し、特別な教育的支援を必要とする生徒について、教職員の共通理解に基づいた指導や支援を行うことを確認しました。

学期末には、取組の成果を検証するため、生徒に実施したアンケートをもとに、「授業づくり」、「視覚的な支援」、「環境整備」等の取組が充実しているか評価し、さらに改善を図りました。

○ 実践の成果

アンケートの結果から、掲示物や収納の工夫などによる環境整備により、「学校生活が過ごしやすくなった」と考えている生徒が多くいることが分かり、教職員全体で、継続した取組を推進することを確認しました。

短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」④

高等学校

生徒の実態に応じて
言葉がけを工夫した取組

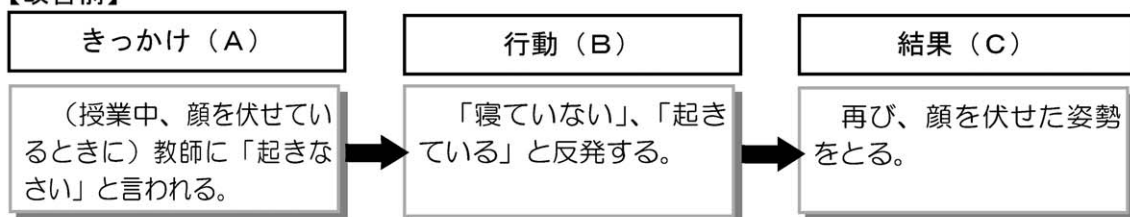
活用した資料

校内研修プログラムP50

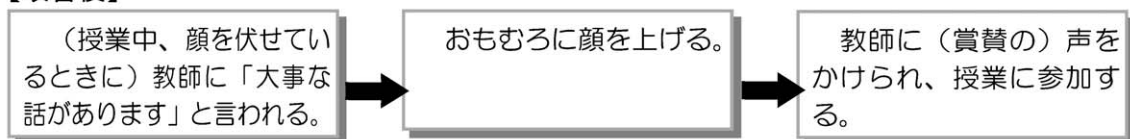
ー教師の言葉がけー

○ 実践の概要

【改善前】



【改善後】



本校では、ABC分析と校内研修プログラムの「好意に満ちた言葉がけ」を参考に生徒への言葉がけについて整理しました。

また、教職員が行った言葉がけと、その時の生徒の反応を記録し、蓄積することにより、具体的ななかかわり方について教職員間で情報を共有しました。

○ 実践の成果

ABC分析や校内研修プログラムを参考に、状況や場面に応じた言葉がけと生徒の行動を記録したことにより、生徒の状態や心情を理解するとともに、生徒自身が肯定的な結果を得ることの大切さを教職員で共有することができました。本実践を保護者とも情報共有し、家庭での言葉がけにも役立てることができました。

ABC分析とは

行動にはその行動を引き起こすきっかけ「A」があり、そのきっかけから行動「B」が引き起こされ、その結果として「C」を得られており、主としてAの部分改善することでBの変容を期待する応用行動分析の手法の一つです。

短い時間での活用3「学級経営交流会・生徒指導交流会での活用」⑤

高等学校

定期的に校内研修を行った取組

活用した資料

校内研修プログラムP50

ー教師の言葉がけー

○ 実践の概要

本校では、校内研修において、生徒が安心して学校生活を送れるよう、「好意に満ちた言葉がけ」など、授業中の配慮事項について検討を行いました。

教師の言葉がけ	好意に満ちた教師の言葉がけ
「静かにしなさい！」	「楽しいことでもあった？授業中だから、今は静かにしよう」 「どこか分からないところがあるかな？」
「忘れ物が多いぞ」	「次は忘れないように、前の日に確認しよう」 「メモを取って見たら？」

校内研修 授業参観シート				
参観者氏名 ()				
月	日	曜日	時間目	年 組 教科名
授業者 先生				
テーマ(10月)	参考になったこと		気になったこと	
好意に満ちた言葉がけに関して				

毎週金曜日を校内研修の日に位置付けました。

「校内研修授業参観シート」を用いて授業参観を行うなど、継続的に校内研修の成果を把握できるようにしました。

○ 実践の成果

本実践では、校内研修で取り組んだことを日常の授業で活用しながら、教職員の意識を高めました。授業を参観した教職員からは、「一人一人に応じた『好意に満ちた言葉がけ』の在り方について、大変参考になった」、「参考になった言葉がけを自身の授業等でも生かしたい」などの意見が出されるなど、大変効果的な取組となりました。

また、今後は、「板書の在り方等についても共通理解を図り、学校全体で統一感をもって一人一人に応じた指導に努めたい」との意見も出されました。

特別支援教育に関する研修会の実施①

高等学校

関係機関と連携した生徒の現状把握と 課題に応じた校内研修の実施

活用した資料

校内研修プログラム P46

一実態把握、支援方法の検討一

○ 実践の概要

[illegible]

学校で作成した実態把握チェックリスト



校内研修会の様子

本校では、特別な教育的支援を必要とする生徒の実態を把握するため、全校生徒を対象に実態把握チェックリストを用いたスクリーニングを行っています。

生徒一人一人の教育的ニーズに対応するため、特別支援教育に関する校内研修を年度当初から年間計画に位置付け、スクリーニングの結果から明らかになった課題に即した支援内容の検討を行っています。

本事例では、外部講師を招へいして支援内容の検討を行うとともに、校内研修プログラム「好意に満ちた言葉がけ」等の演習に全職員で取り組みました。

○ 実践の成果

本取組を通して、学校全体で特別支援教育への理解が深まるとともに、学校や生徒の現状を踏まえた研修を行ったことにより、研修の成果をすぐに活用することにつながりました。

また、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援の流れを明確にし、生徒の困難さに基づいて、支援内容を記載した「特別支援教育フローチャート（案）」を作成するなど、校内の特別支援教育の充実につながりました。

特別支援教育に関する研修会の実施②

高等学校

関係機関との連携による ICTを活用した遠隔研修

活用した資料

校内研修プログラムP75

－発達障がいのある子どもへの指導
や支援に関するICTの活用－

○ 実践の概要

本校では、道内4か所の機関を遠隔授業システムでつなぎ、特別な教育的支援を必要とする生徒への支援について合同研修会を実施しました。

はじめに、北海道立特別支援教育センターの所員に講師を依頼し、「発達障がいや知的障がい、その疑いのある生徒に対する支援の在り方」をテーマに講義を受けました。

その後、各校において研究協議を行うとともに、遠隔授業システムを用いて各校の協議の内容や意見などを交流し、「生徒一人一人の教育的ニーズに基づいた支援が必要であること」、「個別の指導計画は、生徒を理解し、教職員による指導を振り返ることに役立つこと」などについて共通理解を図りました。



A 高等学校



B 高等学校



C 高等学校



特別支援教育センター

○ 実践の成果

各学校からは、「学校全体で生徒を支援する大切さを理解できた」、「生徒のよさを伸ばすため継続的な支援を行っていく必要がある」、「合同研修会を通じて、他校と情報共有ができるなど、遠隔授業システムが有効であることが分かった」などの感想を得ることができました。

特別支援教育に関する研修会の実施③

高等学校

ICTを活用し、専門機関と管内の学校を結んだ遠隔研修

○ 実践の概要

活用した資料

校内研修プログラムP75

ー発達障がいのある子どもへの指導
や支援に関するICTの活用ー



遠隔授業システムを用いて研修を行う様子

本町では、町の教育委員会が中心となり、町内の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校で構成する「4校交流教育連絡会」を開催し、情報交換を行っています。

今年度は、高等学校が事務局を務める「4校交流教育連絡会」において、特別支援教育に関する研修会を実施し、研修会の目的として、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」における合理的配慮の提供について、講演

及び研究協議を通して理解を深めることとしました。

研修会を実施するに当たり、同じ管内の高等学校と遠隔授業システムで結び、特別支援教育センターの所員による「学校現場における合理的配慮について」の講義や「各校の取組と課題」について研究協議を行いました。研究協議では、障がいの特性とその対応等について話題となり、それぞれの障がいについて特別支援教育センターの所員から専門的な助言を得ることができました。

○ 実践の成果

本研修に参加した教職員からは、特別支援教育に関する内容として「個別の教育支援計画を作成し、関係者と共通理解を図る必要がある。」、「生徒の自己肯定感や自尊感情が高まる言葉かけを心がけていきたい。」などの感想が挙がりました。

また、遠隔授業システムを活用した研修の効果として「ICTを活用することにより、研修会場までの移動の負担がなく、専門機関の講義が受けやすくなる」などの感想があり、効果的な研修を行うことができました。

1 校内研修

【活用シート】教員の専門性の向上に向けて自校の年間計画を見直してみよう

研修内容（障がいの特性の理解、学級づくり、授業づくり、保護者との連携、関係機関との連携、個別の教育支援計画の作成・活用など）と、研修形態の工夫（全員が参加する研修、職員会議終了後や学年、ブロック等で行う研修、校内委員会、学級経営交流会・生徒指導交流会、近隣校等との合同研修など）を整理してみましょう。

月	研修内容	研修形態	校内研修プログラム 実践事例集の活用
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
1			
2			
3			
メモ			